

ピリピ人への手紙1章1-11節 「感謝の祈り」

背景

1A 挨拶 1-2

2A 福音の働きへの交わり 3-8

3A 識別力のための祈り 9-11

背景

私たちは、これからピリピ人への手紙を学んでいきたいと思えます。ルカによる福音書の学びを終えましたが、次に何を学ぶかを祈っておりました。教会について学びたい、そして愛の交わりと一致について学びたいと思いました。それでピリピ人への手紙が思い浮かびました。私たちに、神がご自身のキリストの教会を私たちに与えてくださったことを感謝したいと思うこと。それから、このピリピ人への教会においてパウロが、正してあげたいと思たいいくつかの課題がありますが、それを私たちも取り組みたいと願いました。そしてピリピ人への手紙は、イエス・キリストへの信仰や互いの交わりが、具体的、実際的に取り扱われています。単なる教理や、教えや考えではなく、生きている姿の中にその真理が浮き彫りにされている手紙です。

手紙を一読した方はお感じになると思いますが、この書簡はパウロの喜びに満ちている手紙です。けれども、パウロがこの手紙を軟禁状態の中で、ローマの看守に鎖につながれたままで書いていることを考えると、驚くべきことです。その背景は、使徒の働きの最後に書いてあります。「30-31 節 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」彼は、自ら上訴したことについて、ローマ皇帝ネロの前に出廷するためにここで待たされていました。それは、エルサレムにおいて彼が騒動を起こしたという告発なのですが、彼が何もしていないことは明らかでした。けれども、ユダヤ人たちが何とかしてパウロを罪に定めたいと願って、執拗に告訴していました。それを受け持った総督たちは、それぞれの政治的思惑でこの判決を先延ばしにしていたのですが、ついにパウロ自身が上訴したことによって、彼がカイザリヤからここローマに連れてこられたのです。そして使徒の働きは、彼がローマにて拘留されているところで終わっていますが、その状態においてでさえも、彼が神の国を宣べ伝えていたという希望で終わっています。

このように、拘束されており、かつ死刑判決が出てもおかしくないという状況の中で、主にある喜びを言い表しているのが、この手紙です。私たちがキリストにあつてこの喜びにあずかることができる、というのが、この手紙の与える希望です。ところで、このピリピ人へ手紙の他に、エペソ書、コロサイ書、そしてピレモン書も書いており、これらはしばしば「獄中書簡」と呼ばれています。

パウロにとってピリピの町は、特別なところとなった町であります。彼が、マケドニヤ人が助けて

くれと呼ぶ夢を見て、初めてのヨーロッパへの宣教旅行に入った初めての町だからです。その様子は使徒の働き 16 章で読むことができます。ピリピの町についての紹介ですが、「16:12 それからピリピに行ったが、ここはマケドニアのこの地方第一の町で、植民都市であった。」とあります。ピリピは、ギリシヤの王アレキサンダーの父であるフィリッポスにちなんで名づけられました。ローマ初代皇帝アウグストが、ここをローマの植民都市として、他の都市よりもまさる特権を与えました。そこで市民は自治政治を持ち、税は免除されて、ローマの誇り高き都市でありました。

そこにパウロたちが、足を踏み入れたのですが、パウロの宣教チームは必ずユダヤ人たちの集まるところに行って、そこで主の言葉を伝えるところから始めます。ですから安息日に、ユダヤ人会堂に行くのがいつものことでしたが、ピリピにおいては、「祈り場があると思われた川岸」に行きました(16:13)。なぜかと言いますと、ユダヤ教では町にユダヤ人の男性が最低十名いれば会堂、シナゴグを持つことになっていたのですが、そこには男性十名もいなかったからです。それだけ、ローマ色の強い町であったことが分かります。けれども、そこで異邦人でありながら、ユダヤ教に魅かれていた、神を敬うルデヤという、紫布の商人がいました。彼女の心を主が開かせてくださり、彼女はパウロを家に招き、それで彼女と家族の者たちがバプテスマを受けます。

そして、占いの霊に付かれていた女がパウロたちの後ろにいて、叫んでいました。パウロは、彼女から占いの霊を追い出しました。すると、その占いによって金を儲けていた者たちがパウロと相棒のシラスをローマの役人の前に引き出して、このように訴えます。「16:20-21 この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」ユダヤ人に対する嫌悪、またそのような風習を嫌う空気が濃厚にただよっていたことを伺わせます。そこで、パウロはこの手紙の中で、「御国の市民の生活をしてください(1:27 参照)」と言いますが、ローマ市民であることを住民が誇っていたその町の中で、自分たちは神の国の市民であることを誇る生活をしてください、とお願しています。

そしてパウロとシラスは牢屋に入れられました。その時に鞭で打たれています。けれども、子の二人は何と夜に、「神に祈りつつ賛美の歌をうたって」いました(16:25)。そうです、鞭打たれて、背中が激しく痛んでいたはずの時に、彼らは祈り、賛美の歌をうたっていました。ですから、再び牢に入れられているパウロは、同じように主にあって喜び、感謝している、その霊を保っています。そして、大地震が起こり、牢の扉が開き、その看守は自害しようとしたのですが、パウロが止めて、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言いました(使徒 16:31)。そしてその看守と家族がバプテスマを受けました。

こうして、ピリピにおいて教会が誕生したのです。パウロはこの後、マケドニアを離れましたが、パウロの一行にピリピにいるキリスト者たちは、金銭的な支援を送っていました。そして今、パウロはローマで投獄されている身ですが、ピリピの教会が始まってから十四年も経っています。それなのに、彼らは自分たちの指導者である、エパフロデトという人をパウロに遣わし、さらなる金銭的

支援を送ったのです。パウロの心は満たされました。それは、物欲しさにそう言っているのではなく、具体的な愛の行為にある彼らの信仰の実を見ることができたからです。

もしかしたら、その金額は少額だったかもしれません。コリント人への手紙第二 8 章に、彼らがどのような状態から捧げたのかをパウロは記しています。「2コリント 8:1-2 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」これは、エルサレムにいる兄弟たちへの醸金の中で語られている言葉ですが、けれども彼らの経済状態は同じでありました。激しい反対の中で、彼らは経済的にも苦境にありました。それにも関わらず、惜しみなく喜んで捧げたのです。このように、彼らは神の恵みに満たされていました。自分を忘れて、神の恵みに満たされていました。

この手紙は、基本的にこの尊い献金についての神への感謝がその背後にあります。それだけでなく、エパフロデトから聞いたピリピにある教会の問題についても、取り上げて彼らに勧めを行なっています。

1A 挨拶 1-2

1:1 キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。

パウロの手紙にある、挨拶の言葉です。初めに、「キリスト・イエスのしもべ」と言っています。ここだけでも、数多くのことを語っています。メシヤ、約束された油注がれた方であるイエス、罪を救う方のしもべであります。キリストというのは、イスラエルが待っていた救い主、油注がれた方メシヤのことです。そしてイエスは名前で、「ヤハウェは救い」という意味があります。

この方のしもべです、という言葉、ここの「しもべ」は、ドューロスというギリシヤ語で、奴隷の中でも全く自由のない、主人の所有となった者であります。つまり、イエスを自分の主人として、私はこの方にすべて明け渡された者であり、この方の命令に従うことが自分の命そのものである、という告白であります。しばしば、「私の神からの召しは何でしょうか。」という言葉を聞きます。初めに、この偉大な召しを受け入れることをお勧めします。「キリスト・イエスのしもべ」だという召しです。自分の命はただイエス・キリストにある。私はこの方のものになった。この方の命令に従うことだけが、私の生きている目的だ、という召しです。

そしてピリピ書において特徴的なのは、他の教会に対する手紙と異なり、自分が使徒であると紹介していないことです。多くの書簡には、「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから（エペソ 1:1 等）」と書かれています。使徒であるということは、その語る言葉には神の権威があり、実際にその力が働いていました。ガラテヤ書の挨拶に至っては、そこではユダヤ主義者が入り込

んで、彼らの福音信仰を覆そうとしていたので、「1:1 使徒となったパウロ・私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです。」と非常に注意深く書いています。

なぜピリピ人に対しては、自分が使徒であることを主張せず、紹介もしなかったのか？とても簡単です、使徒であることを彼らは心から受け入れていたからです。そのような公式な発言、またパウロが強いられて、自分に与えられている務めを弁明しなければいけない状況では全くなかったからです。彼らの愛の中に、使徒に対する尊敬があり、そのように書くまでもなく、愛による結びつきがありました。親しい友の間には、そのような主張はありません。

そして、「キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち」と言っています。パウロは、4 節でも「あなたがたすべてのために祈る」と言っていますし、7 節に、「あなたがたすべてについてこのように考える」と言っていますが、「すべて」を強調しています。なぜなら、ピリピの教会の中で、二人の女性の働き人が相対立し、競争していたことを、パウロはやんわりと戒めている箇所が 4 章 2 節にあります。1 章 27 節には、「心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており」とあり、2 章 2 節には、「あなたがたは一致を保ち」と勧めています。つまりパウロは、「私は、その競争の中にはいないよ。あなたがた全てと愛の交わりを持っている。キリスト・イエスにあつて、全てが聖徒なのだ。」と言っているのです。私たちは、ただ神の恵みによって、福音だけによって、聖なる者、聖徒とされました。この単純な共同体の中にいることを忘れてはいけません。

私たちは、この手紙でパウロが、この苦境の中でどうして自由に、喜びの心を持つことができたのか、その秘訣を学んでいきます。彼のその寛容な心、広い心はどこから来ているのか？それは、神の国の広がりやを彼は良く知っていたということが出来るかもしれません。自分というものが、その喜びの中で消えています。キリストの名が広まっていること自体に喜びを感じています。神の国、キリストのすばらしさの中に彼が浴しているのも、自分ではないところに集中することができたのでしょう。そして、パウロはピリピにある教会については、ただキリスト・イエスにあつて人々が聖なる者とされた、というその単純な真理に喜びを抱いていました。

次に、「監督と執事たちへ。」と書いています。ここは監督たちと、執事たちへ、と監督も複数形になっています。監督は、教会の全体を監督し、治める務めを担っている人であり、牧者と同一人物です。そして執事は、教会における物質的な必要についてそれに仕える責務を持っている人々であります。おそらく、彼らの指導によってパウロへの宣教支援金を送ることにしたのでしょう。

1:2 どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

これはパウロのいつもの挨拶の言葉ですが、けれども、強調しすぎることはありません。「私たち

の父なる神と主イエス・キリスト」というそこにある交わりから、パウロの宣教の働きの全ては始まっていました。パウロは、この手紙の中で、「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。(1:21)」と言っています。そして、互いに謙遜を身に付けることについては、キリストが神の身分であられたのに、人の姿を取って、実に十字架に至るまで仕えられたことを2章で話しています。そして3章では、キリストを知ることのすばらしさのゆえに、一切のことを塵芥だと思っているとまで言っています。そして、キリストとその復活の力を知って、キリストの苦しみにあずかることも知ったとも言っています(3:8,10)。すべてのことは、父なる神と主イエス・キリストとの生きた結びつきから出て来ています。

そしてその結果が、「恵みと平安」です。神とキリストとの交わりは「恵み」によるものです。恵みとは、自分の行ないや功德に関わらず、神が一方的に私たちに好意を示しておられ、祝福されることです。自分が神に対してどれだけのことをしたか、愛しているかではなく、神が自分にどれだけのことをしてくださったか、というのに集中します。そして「平安」は、「恵み」の副産物です。神との平和、神の平安を持っているかどうかは、私たちがキリストと正しい歩みをしているかどうかの、大きなバロメーターになります。

2A 福音の働きへの交わり 3-8

そして3節から8節まで、パウロが感謝の祈りを神に捧げているところを読みます。

1:3 私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、1:4 あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、1:5 あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。

パウロは、彼らがキリストのものとなされたこと、救いにあずかったことを神に感謝しているだけでなく、それ以上の理由で感謝しています。それは、「福音を広めることにあずかって来た」ということです。パウロに対して、ピリピの人たちは金銭的支援を初めから終わりまで、行なってきたのですが、それは彼のことを思っていることではなく、福音を広めることに彼らが関わっているからです。この言葉は、元々「福音の交わり」と訳すことができます。

パウロは、このように金銭的な支援をしてくれたことについて、「神に感謝」しています。その人たちに感謝するのではなく、神に感謝しています。神の恵み、神の働きについて、その恩恵にあずかった人々は、受けた者に対してその人たちに感謝はもちろんしていますが、神への感謝が尽きないで溢れ出てきます。その溢れ流れる恵みに、お返ししようなどということはできず、ただただ喜びに満たされて、それで主にお仕えしたいと願うのです。

そして、祈るごとに「いつも喜びをもって祈」っています。喜びは、その金銭的支援が与えられたから、一時的な感情で喜んでいるわけではありません。そうではなく、ピリピにおいてそこで受けた苦

しみのことを考えても、その苦しみの中でまことの喜びを見つけていたからです。彼とシラスが、鞭で打ち叩かれて、けれどもその投獄があったからこそ、主がその中で看守とその家族を救ってくださったその御業に預かることができたからです。

つまり、彼の抱いている喜びというのは、第一に、父なる神と主イエス・キリストとの交わりから出て来ている喜びであります。この方が決して裏切らず、真実であられるので、彼はそこから出てくる良き賜物に反応して、喜ぶことができます。そして、福音の広がり、つまり神の国の広がりを楽しんでいます。神の国が攻められているように見えても、必ず神の国はこの世に攻め入っているのです。教会は打ち叩かれているように見えても、「ハデスの門もそれに打ち勝てません。(マタイ 16:18)」という約束通りのことが起こっているのです。

要は、私たちがその神の喜びの中に交わっているかということです。そこで、「福音を広めることにあずかって来た」という言葉に注目したいと思います。直訳は、「福音の交わり」です。交わり、ギリシヤ語ではコイノニアであります。日本語訳では「交わり」と訳されずに、「あずかる」と訳されている箇所が他にもあります。けれども、これはコイノニアです。

これはどういうことか？ イエス様が、失われた者を探す時に、見つかった時にその喜びを言い表したところを思い出してください。「ルカ 15:4-6 あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。」イエスが地上に来られて、一人が悔い改めればそこに大いなる喜びがあることを教えておられます。主が福音をもって、この喜びを他の人々にも分かち合いたいと願っておられます。私たちが福音宣教の働きをする時に、それは私たちがすることではなく、主が既にしておられること、したいと願われていることに、私たちがその働きに関わりたいか、いや関わるだけでなく、交わりたいかということをお願いしているのです。

その交わりは、特に多くの労苦をとまなうでしょう。主も、失われた羊を探すのに労苦した羊飼いの姿を見せていますし、放蕩息子に至っては、失われた息子を待っている父親の悲しみもその過程の中にあります。しかし、その父の心、また主イエス・キリストの心に自分自身が入って行って、主のお心が自分のものとなっている時、それが「福音の交わり」の中にいるということになります。私は海外宣教に出て初めて分かったのですが、自分がそこにいくことによって主が人々を救われるのではなく、主がそでにそこにおられて救いの業を行われようとしているのですが、むしろ私が主のおられるところにやって来た、というほうが正解なのです。

ですからパウロにとっては、彼らが自分の働きに金銭的支援を送ったということは、このようなすばらしい主ご自身のなされていることに、彼ら自身もその中におり、一つになっているという、そ

ここにあるとてつもない喜びの中にいるのです。私たちは、互いの交わりをこれから作り出すのではありません。既にある主にある交わり、御霊の働きの中に自らの考えや利得を捨てて、ただその中に入って喜んでいるのかどうか、その信仰の従順が問われているのです。

1:6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。

この箇所はとても有名で、私たちが励ます神の約束ですが、大事なのは文脈です。ピリピの人たちがパウロの宣教の働きの初めから終わりまで共にいたという証しがあって、初めてパウロは彼らに対する神の良い働きに確信を持つことができました。主が救いの働きを行なわれていて、彼らが積極的にその働きの中にいるという能動的、主体的な行為があります。しかし、その能動的、主導的な行為自体も、神が彼らにその志を与えてくださっているのです、主がそれを完成させてくださることをパウロは確信できたのです。その関係について、2章 12-13 節で説明しています。「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」

主は、ご自分の御心にしたがってご自分の計画を完成されます。しかし、その計画に私たちが招き入れたいと願われていて、そこで私たちの祈り、志、従順を通してその御業の中に招き入れてくださっているのです。

そして、「キリスト・イエスの日が来るまでに」とパウロは言っています。パウロは、他の手紙においてもそうですが、主が再臨されること、また教会のための戻ってきてくださることについて強い信仰を持っていました。この日こそが、私たちの教会生活と信仰生活の目標地点であり、主が、ご自分の地上でなされている働き、その収穫をご自身に受ける清算の時であります。私たちが、主イエス・キリストの再臨の希望なくして、福音宣教の働きをすることはできません。言い換えれば、主が戻って来られることを信じているので、私たちはどこに目を向けるべきか

1:7 私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。

パウロがそこまで強い、堅い確信を持っていることについて、それは正しいことであると言っています。その理由は「私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているとき」も、というところに表れています。「箴言 19:22 人の望むものは、人の変わらぬ愛である。」とありますが、パウロが福音宣教の働きで活発な時だけでなく、投獄されている時もその愛の行為を惜しまずに与えていたというところに、彼らの忠実さが表れているからです。その人々の愛が真正であるかどうかは、

その人の発している言葉ではなく、その言葉を裏付ける行ないと実践がどれだけあるかに関わっています。パウロは、投獄されている時に、そばにいる人が少なくなっていることを 2 章 20-21 節で述べています。第二回目の投獄、そして皇帝の前での死刑判決の時は、さまざまな同労者や働き手が彼からいなくなってしまったことを、テモテへの第二の手紙 4 章で彼は述べています。

ピリピの人々のこのような変わらぬ愛の行為、それは「恵みにあずかった」という言葉に裏付けがあります。ここにも再び「コイノニア」の言葉が使われています。恵みの交わりをしたということです。主のすばらしい恵みの交わりに預かる時に、これは彼らの愛の力ではなく、そこから溢れてくる命、また新たに与えられる力があります。これは戦いであり、愛が冷えて、この世を愛するようになるかもしれませんし、教会が内向きになり、自分たちのことを求めるだけになるかもしれませんし、しかし主が何を恵みをもって行なっておられるのか、それから目を離さないでいるならば、いつもその恵みと交わりをしているならば、自分ではなく神ご自身がその変わらぬ愛を注いでくださいます。

1:8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。

パウロのものすごく深く、熱い思いをここで言い表しています。ここの「心」は、「はらわた」というのが直訳です。キリスト・イエスの愛が自分にはらわたにしみこんでいるということです。大事なのは、これがキリスト・イエスの心だということです。彼自身の心、肝に、その愛がしみ渡っているということです。キリスト者の愛が表面的になっていることに気づきます。それは、自分たちの愛が枯渇していることに徴であります。しかし、それは良い徴です。私たちの互いの愛は、私たち自身からのものであってはならないからです。私たち自身から出てくるものは、憎しみであり、妬みであり、自己中心であり、自分を愛することです。しかし、その愛に死に、それでただキリストの愛に満たされることを切に慕う時に、主はその愛で満たしてください。ですから、人間的には、どうしても腹が立つと思っても、霊においては留めもなくその人を慕っているという、ちょっと複雑な感情を抱きます。

ですからパウロは、「そのあかしをしてくださるのは神です」と言っています。なぜなら、それは人にたくさん話して説得できるものではないからです。大きな声で、私はあなたを愛しています、というのではなく、ただ神との交わりの中で神は知っておられるという類いのものであります。そして、その愛は自分で主張しなくとも、相手には伝わっていきます。大事なのは、心の清さであり、主が自分に愛を注いでくださっているということです。

3A 識別力のための祈り 9-11

そして、パウロは彼らについての願いを、主に対して祈ります。

1:9 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、1:10a あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。

パウロの祈りは、彼らの霊的成長、霊的な成熟を願っているものです。彼らが「愛」を持っていることはまぎれもない事実です。これは真実な愛です。しかし、それがさらに満ち溢れるためには、その愛の中に「真の知識とあらゆる識別力」が必要になります。私たちが主イエス・キリストに出会って、その愛に触れて変えられることは間違いありません。けれども、神がいかに私を愛してくださっているのか、それを知るためには、じっくりと時間をかけて、聖書に書かれている、御言葉に示されている神の知識が必要です。例えば、エデンの園で「あなたは、どこにいるのか。」とアダムとエバに語られた時に、それを警官のように監視している言葉として受けとめるのか、それとも、「あなたはどこにいるのか。」と迷子になった子を探している親の嘆きの声として受けとめるかは、その他の神の言動と比べてみて、後者であることに気づくようになります。

神の愛というものが、どれだけ深く、広く、高く、長いのか、それはちょうど子が全幅の信頼を親に寄せていても、その愛の深さを自身が大人になったから理解するというのと同じように、自分に注がれている神への愛は確かに真実であっても、その愛が成熟する必要があります。

そして「識別力」また「真にすぐれたものを見分ける」という言葉を使っています。成熟している者の特徴は、その見分けができるということにあります。「まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはけません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。(ヘブル 5:13-14)」真にすぐれたものとは、キリストご自身のことだと思います。後でパウロは、「主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさ(3:8)」と言っています。

このような成熟、見分けができていないと、キリストの愛についても大きな誤解をします。それが起こったのはコリントにおける教会でした。彼らはキリストにあって、まだ肉に属している者、幼子のようにであるとパウロに言われていました。そして、パウロの彼らに対する愛の行為は、パウロが自分たちを支配していると言って誤解されていました。ちょうど、警戒していて心を開かない子どもようになっていたのです。「2コリント 6:11-13 コリントの人たち。私たちはあなたがたに包み隠すことなく話しました。私たちの心は広く開かれています。あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。」この、「自分の心で窮屈」という言葉は、強い感情、先ほど同じ「はらわた」という言葉が使われています。ですから愛には、成長と成熟が必要です。そのために必要なのは、神の知識とそこから出てくる見分けであります。

1:10b またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、1:11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。

再び、「キリストの日」すなわち、教会のために主が戻って来られる日のことです。その時には、成熟さが完熟しているように祈っています。「純真」という言葉があります。ここのギリシヤ語は、「太陽の光によって試される」という意味です。つまり、愛によって行っていたことなのかどうか、その愛が試されて、神の知識と識別力によって純真になり、義の太陽(マラキ 4:2)と呼ばれた再臨のキリストの光によって残っている純真さであります。私は、いつもパソコンの画面を見て学びの準備をしますが、朝起きて、電源を入れる前に、どれだけその画面が汚れているか良く分かります。太陽の光によってその汚れが反射されて見えるのです。それで拭いてから電源を入れますが、一度入れると、内部からの光で見えなくなります。キリストだけの光になると、このようにこれまで見えなかった汚れが見えるのですが、それでもきれいであるということは、絶えず、私たちが自分自身を吟味していかなければいけないことを示しています。「1コリント 11:31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。」

そして「非難されるところがなく」というのは、外側の人々に対する行ないであります。心の中がいかにも純粋だと思っても、外側の人、教会外の人々につまずきを与えるようであれば、それは成熟したクリスチャンとは言えません。パウロが、諸教会で受け取った献金の取り扱いについて、コリントの教会の人にこのように言いました。「2コリント 8:20-21 私たちは、この献金の取り扱いについて、だれからも非難されることがないように心がけています。それは、主の御前ばかりでなく、人の前でも公明正大なことを示そうと考えているからです。」ですからキリストの日には、二つのことが要求されます。第一に、主の前に出て、恥ずかしくないか。第二に、他の人のつまずきになっているものはないか、という問いです。

そして、「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者」となることをパウロは祈っています。これはとても大事です。私たちは行いではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められます。私たちに何一つ良いものがなく、むしろ神に反抗する罪のみがあるのですが、キリストがその不義に対する神の怒りをご自分の十字架で受けてくださいました。そして神は、そのキリストにあってご自分を信じる者を見てください。これが、義と認めるということです。ですから、ここで自分の行なう義ではなく、イエス・キリストによって与えられる義の実、と言っているのです。

義と認められたことによって、私たちは神に受け入れられ、聖なる者とされ、あらゆる霊的祝福を受けています。もうこれ以上、自分が認められるために何かを行なわなくてよいのです。ここにある神の恵みに感動し、それで自分自身を神に明け渡して、この方に従う時に、聖霊が働いてくださいます。自分ではない、上からの賜物として実を結ばせてくださいます。それが、ここで言っている義の実です。これはちょうど、神が空で水分を作り、それを雲にして雨を降らせて、川として流れ、海に入り、蒸発して再び空中の水分になるように、神から義は始まり、それが地上でキリストによって私たちが義としてみなし、その義とみなされた者たちが主を信じ、仕えることによって義が神に戻ってきます。神の栄光と誉れになるのです。